

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00533

研究課題名（和文）シンブー諸語の比較調査研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of the Shimbu Languages

研究代表者

千田 俊太郎（TIDA, Syuntaro）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：90464213

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：世界でも唯一のドム語研究者としてドム語と關聯領域の情報を発信し続けることができたのは本科研の成果である。またドム語研究にも關はるが言語研究のメタ的な研究にも携ることができた。研究期間が「コロナ禍」に完全に重なったため、当初目指した、現地調査を通じて新しい資料を得ながらシンブー諸語比較研究を推進する方式にはそのまま沿ふことはできなかつたことは悔やまれるが、自身のエスペラント研究やトク・ピシン研究とドム語研究の接續がそれなりにかなひ、新しい研究領域を開拓した點は、怪我の功名とも言へるやうに考へる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドム語の人稱代名詞、數詞、形容詞研究を一步進め、ドム語記述研究を發展させた。ドム語研究者として、計劃言語とピジン・クレオールの研究を一般言語學の中に位置付ける試みを行つた。これらはみな、世間一般にあまり省みられない、あるいは誤解を受けがちな部分を持つため社會に発信する意義は大きいものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research project enabled me, the only researcher of the Dom language in the world, to continuously publish papers and deliver talks about the Dom language and related fields. I was also able to engage in meta-analysis of general linguistics in addition to Dom language studies. Unfortunately, the research period coincided completely with the COVID-19 pandemic, preventing me from pursuing the original plan to advance comparative research on the Simbu languages through fieldwork to obtain new data. However, to a certain extent, I was able to integrate my research on Esperanto and Tok Pisin with my research on the Dom language. This unexpected development has opened up a new research area.

研究分野：記述言語学

キーワード：パプア諸語 ドム語 形容詞 数詞 代名詞 類型論 言語学史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ドム語の記述研究は世界でも申請者しか行つてゐない。またドム語の周辺の諸言語の記述は現役の宣教師、言語学者がほぼゐないため完全に停滞してゐる。このやうな状況下で、ドム語を含むシンプー諸語が一つの語族をなすのは明らかであつたものの、その中でのドム語の系統的位置の詳細は明らかではなかつた。既存のシンプー諸語記述は、語彙・音韻・文法どれをとつても世界の言語の記述にかなりの遅れをとつてゐるといへるが、聲調の記述など、いくつかの點は申請者のもののほかには信頼できるものがない。

### 2. 研究の目的

ドム語、及び周辺の諸言語の調査を進め、新資料を加へることで比較研究を進めるのが當初のこの課題の目的であつた。その目的は、コロナ禍で大きく方向轉換せざるを得なかつたため、ここでは當初の目的はくたくだしく述べることは避けたい。

ドム語の周辺の諸言語については、既存の資料が極めて少なく、これまで申請者が行なつてきた比較研究をさらに推し進められる見込みは薄かつた。ドム語も、その周辺の諸言語も、現地に向かはなければ、新たな言語資料の収集は難しいからである。

一方で、これまで収集してきたドム語資料には、いくつか未整理のものがあり、電子化を進めたり、分析を進める餘地が若干残されてゐた。また、ドム語の分析を進めつつ、オセアニアの言語状況、世界の言語の類型を踏まへたドム語記述の意義について社會に発信することも可能であつた。そのため、ドム語の記述を中心に、オセアニアの言語状況と言語類型論を踏まへた考察を進めることを目的とした。

### 3. 研究の方法

諸言語の現地調査を行ひ、共通の改新を経たグループを確認することで言語の歴史的な分岐を研究するのが、當初の目的を達成するための方法であつた。次に、方針轉換後の目的に即して方法を説明する。

申請者はドム語のほか、系統・類型の大きく異なる複数の言語に通じてをり、それらの諸言語の一次資料も有してゐた。ドム語の未整理資料や未分析資料を扱ふにあたり、申請者の知つてゐる他の言語との對照といふ観点から検討を進める方法を取ることにした。

申請者の知る言語のうちでも、エスペラントといふ、近年では、あまり多くの言語学者によつて扱はれてゐない計劃言語は、多くの點でドム語と對照的な特徴を見せるやうに思はれた。ドム語とエスペラントとを研究の俎上にのせるには、橋渡しの存在として、トク・ピシンといふピジン・クレオールに注目すべきだとも思はれた。そこで、特にこれらの言語についてはドム語と合はせて調査を平行して進めることとした。

最後に、申請者はつとに、既存の言語學史の言説を批判的に検討する作業を始めてゐた。そこで、言語學の研究史について見直しを進めつつ、關聯研究と接續させることも研究方法に盛り込んだ。

### 4. 研究成果

以上に述べた通り、コロナ禍の状況で當初の目的通りの成果を出せないことが確定したため、ドム語研究を軸としながら目的と方法を調整した。その結果、ドム語の記述的成果の提出に加へ、少數言語研究と計劃言語研究、ピジン・クレオール研究といふ、一見異質な言語研究についてメタ的な考察を行なひ、一般言語學の中での位置付けについて新しい提案を行ふことができた。

まづ、ニューギニアの諸言語の人稱代名詞の體系についてデータを整理し、數の對立や、所謂除外・包括などの對立いかにについて傾向を見た。既存の概説書にはパプア諸語を南島諸語と對比的に扱ふ流れで除外・包括の對立がない言語が多いやうな印象論が述べられることもあるが、パプア諸語には人稱代名詞の體系の中で、除外・包括の對立が存在するものもかなりある。ドム語のやうに、南島諸語との歴史的な接觸がほとんど認められない内陸部のパプア諸語に除外・包括の區別があるのは、例外的な振る舞ひではないことが分かつた。ただし、ドム語の人稱體系は、代名詞、動詞につく主語人稱接尾辭、名詞につく所有者人稱接尾辭の三者で、人稱・數の區分の様相が異なる。この點は、やや特異だともいへる。

次に、ドム語、及びオセアニア地域の諸言語の數詞について、調査・考察を進めた。オセアニア地域では、南島諸語を除けば數詞(あるいは數表現専用語根)の乏しさによつて特徴付けられ

る言語が多い。南島諸語であつても、ニューギニア地域に近づくにつれ、祖語の數詞を體系的に保持してゐない言語が目立つ。ドム語も數表現専用語根は、一と二を表はすものしかない。ところが、そのうち一を表はす語彙項目は複數存在する。ドム語における、複數の「一」がもつ異なる含みについて、同一性、唯一性、非現實性、個々別々性、不定性、特定性といった觀點から記述した。

形容詞については、その通言語的な認定方法を確認し、ドム語のほかエスペラント、朝鮮語、トク・ピシンを含めた對照言語學的分析・考察を進め、動詞的形容詞と名詞的形容詞のほか、關係形容詞の存在に目を向けて言語類型的な在り方にも踏み込んだ議論を提出した。ドム語は形容詞が名詞的だが、所屬語彙數が少なく、原則として所屬語彙の全てが性質形容詞の範圍に収まるものである。一方でエスペラントは名詞的な形容詞をもち、形容詞に所屬する語彙が多いのみならず、ゼロ派生による生産的關係形容詞化が存在し、形容詞が極めて大きな語類をなしてゐる。申請者はいくつかの場で、エスペラントがヨーロッパの言語多様性の低さに支へられて言語として成立したと論じてきた。形容詞の多いといふ事實はエスペラントがヨーロッパの諸言語から受け継いだ特徴の一つだといへる。

ドム語から目を轉じてエスペラントやトク・ピシンについて中心に論じる副産物的な成果も、複數の口頭発表・論文に辿り着いてゐる。計劃言語とピジン・クレオールには、取り上げられ方に類似が認められ、特に言語性そのものが疑はれてきた歴史がある。また計劃言語やピジン・クレ奥ールの言語性の「證明」のために使用領域の擴大が強調されてきたことも共通點と言つてよい。なほ、ドム語のやうに、使用ドメインが多様でない言語であつても、民族語であれば言語性が疑はれることはない。

その他、ドム語のテキスト資料である、訓話についての語りの公開、ドム語の存在表現の記述、日本語の動詞のアクセント、エスペラントの言語類型、エスペラントの子音群、エスペラントの出勤形容詞語幹が動詞活用する問題などを取り扱ひ、一定の成果をあげた。例へばエスペラントが極端な膠着性をもつのは事實だが、それは計劃言語ゆゑの特徴であり、膠着性は當然のことながら（河野六郎的な意味での）アルタイ性を意味しない。

最後に、日本については新村出、江實、歐米についてはフンボルト、シューハルト、サピアといった言語學者たちに注目した言語學史的な成果もあげた。新村出については、言語フィールドワークのプロトタイプの定義を踏まへて、方言調査に加へてエスペラントの大會参加をフィールド調査とみなせる可能性を指摘した。江實については、服部四郎からの影響、大野晉との連携のほか、その議論の中に、パプア諸語といふ名付けが対象を實體化する構圖が見られることを指摘し、實はパプア諸語研究自體が内包する問題と通底するところがあることを論じた。フンボルトについては A. W. シュレーゲル宛書翰(1821-11-01)に「少なくともこれまで膠着がないやうに見えた言語はない」といふ発言があることなどを掘り起こし、コセリウやトラバントなどの論じてきた通り、フンボルトが言語を分類する志向性をそもそももたない人物であつたことを論じた。シューハルトについては、イエスペルセンと同様、計劃言語とピジン・クレ奥ールの両方に關心を抱いた言語學者であり、さまざまな先進性を確認したほか、「混合言語」(今日の「接觸言語」)や「人工言語」(當事者のいふ「計劃言語」)がともに相對的な基準しかもたないことを論じてゐる點を特に評價した。サピアについては、グリーンバーグ以降の類型論研究で廣く廣まつてゐる誤解として、膠着度指數や統合度指數の明確化を行なつたことがサピアの主たる類型論的研究成果かのやうに取り上げる言説が多いことを取り上げ、實際には言語を總體として分類するやうな類型論として新しいアイデアを提出したことを確認し、實際の諸言語への適用方法を論じた。例へば、サピアの類型論に従へば、エスペラントは多くのヨーロッパの印歐語やバントウ系の諸言語と同様、「混合關係的」な言語だといへる。

以上に見た通り、本來のこの研究課題の目的は達成されたとは言へない。しかし、もとの目的から方針を轉換し、隣接分野や新しく開拓した研究領域において、本來目指したのと同等以上の水準で、成果を発信することができたのではないかと自負するところである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 TIDA, Syuntaro	4. 巻 3 (11)
2. 論文標題 Kial multas adjektivoj en Esperanto? Komparo kun la korea, la japana, Dom, Tokpisino kaj aliaj lingvoj	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Esperantologio / Esperanto Studies	6. 最初と最後の頁 22-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 千田 俊太郎	4. 巻 13
2. 論文標題 計画言語とビジン・クレオール	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Language and Linguistics in Oceania	6. 最初と最後の頁 16-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 千田 俊太郎	4. 巻 21
2. 論文標題 エスペラントの出勤形容詞の動詞活用をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ありあけ：熊本大学言語学論集	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 千田俊太郎	4. 巻 12
2. 論文標題 ドム語の「一」を表はす形式とその用法について：同一性、唯一性、非現実性、個々別々性、不定性、特定性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語記述論集	6. 最初と最後の頁 175-203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千田俊太郎	4. 巻 15-16
2. 論文標題 オセアニアの少数言語	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 GR-同志社大学グローバル地域文化学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/00028031	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千田俊太郎	4. 巻 19
2. 論文標題 日本語の動詞の語幹とアクセントに関する覚え書き	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ありあけ：熊本大学言語学論集	6. 最初と最後の頁 1--32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千田俊太郎	4. 巻 18
2. 論文標題 ドム語の訓話	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ありあけ：熊本大学言語学論集	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千田俊太郎	4. 巻 80
2. 論文標題 Ene yuhyengloncek ulo pon Esuperantho	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國語文學	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千田俊太郎	4. 巻 90(2)
2. 論文標題 言語の壁を超えた言語の発展	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 エスペラント Revuo Orienta	6. 最初と最後の頁 9-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千田俊太郎	4. 巻 22
2. 論文標題 エスペラントの子音群について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ありあけ：熊本大学言語学論集	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 千田俊太郎
2. 発表標題 ニューギニアのパプア諸語について：オーストラリア諸語、オーストロネシア諸語との交渉の角度から
3. 学会等名 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科、招待講演、2021年9月27日 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 千田俊太郎
2. 発表標題 エスペラントから見た言語類型、品詞としての形容詞
3. 学会等名 言語の類型的特徴対照研究会第22回大会 2023年8月6日 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 TIDA Syuntaro
2. 発表標題 On Japanese Verbs with Classical Accent
3. 学会等名 Linguistics and Asian Languages, Adam Mickiewicz University in Poznan; 2023年3月25日 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 千田俊太郎
2. 発表標題 エスペラントから見た言語類型、品詞としての形容詞
3. 学会等名 言語の類型的特徴対照研究会第22回大会 2023年8月6日 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 千田俊太郎
2. 発表標題 ドム語の単純存在表現と様態存在表現
3. 学会等名 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科、招待講演、2020年12月21日 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 千田俊太郎
2. 発表標題 シンブー諸語と語聲調
3. 学会等名 言語記述研究会第102回例会2020年1月11日(土)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 千田俊太郎
2. 発表標題 ニューギニアの諸言語の人稱代名詞
3. 学会等名 2018年度アジア・アフリカ言語文化研究所言語研修(メエ語)文化講演(2018年9月6日)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千田俊太郎
2. 発表標題 新村出とフィールド言語學
3. 学会等名 日本言語学会(80周年記念シンポジウム 2018年11月18日)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 長田俊樹・福井玲・安田敏朗・林範彦・伊藤英人・千田俊太郎・平子達也・永澤濟・児玉望・狩俣繁久・齋藤成也・風間伸次郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 350
3. 書名 日本語「起源」論の歴史と展望：日本語の起源はどのように論じられてきたか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------